

台湾への番薯（サツマイモ）伝入紀

■ ■ ■
(財)医薬工業技術発展中心 勤 繹瑾 (Chin, Yei-Chin)

1. はじめに

亜熱帯に位置する台湾では、一年中どこでもサツマイモを見かける。また、台湾ではサツマイモは昔からずっと庶民的な食べ物として親しまれている。このようにサツマイモは台湾人の生活の一部となっているので、サツマイモが外来植物であるとの特別の意識はなかった。しかし、大学院生として日本に留学し、大阪府立大学で「サツマイモ胚性カルス利用による種苗増殖」^{1, 2)}の研究をするにつれ、台湾における外来植物としてのサツマイモを強く意識するようになった。帰国後、最近まで台湾中央研究院生物農業科学研究所で遺伝子組換え研究をしていたが、院生時代から気にかかっていた「台湾へのサツマイモ伝来」について週末などに調査をした結果を以下に紹介させていただきます。

2. 中国経由の可能性

台湾の歴史では、17世紀末までは先史時代とされており、台湾の先住民は長く文字を持たず、口述伝承でした。このため台湾サツマイモの最初の記録は、1603年に中国人・陳第（明朝の退役将軍、当時66才）により著された「東番記」³⁾です。この「東番記」とは、陳第が福建への旅行中に海難で台湾に漂着し、1年間を台湾西南部沿岸（現在の台南市付近）で過ごすが、その体

験をもとに先住民の生活風習と地理を記したものです。その中に番薯（サツマイモ）が“蔬菜”として葱（ネギ）、薑（ショウガ）などとともに栽培されていたとの記録があります。因みに穀類としては米、大小豆、胡麻などが記録されています。このように「東番記」は17世紀初頭にサツマイモが台湾に存在したとする一番古い文献です。しかし、その伝入の時期や担い手などについては記載がなく、謎のままなのです。

一方、中国へのサツマイモの伝入については、1593年に陳振流がフィリピンから持ち込んだのが嚆矢とされています⁴⁾。陳振流は福建省福州の商人で、フィリピンのルソンでサツマイモを知り、輸出厳禁の芋の蔓を船の帆縄に縋り込むことで持ち出しに成功し、中国南東部の福州にサツマイモを伝えた人です。陳振流がサツマイモを持ち帰った翌年（1594）の飢饉において、福建省巡撫（地方民政長官）の金学曾は、サツマイモを大いに奨励、成果を上げ、このためサツマイモを「金薯」と呼ぶようになった、との話があります。芋蔓を持ち帰った翌年に栽培を奨励することの不自然さがありますが、その頃に中国福建省でサツマイモ栽培が奨励されたことに間違いはないでしょう。

その16世紀末には倭寇などの海賊が横行するくらいですから、陳第がそうであった

ように福建省沿岸に住む人は、船に乗り海を渡っている。サツマイモはその機会に中国経由で台湾へきた可能性があります。しかし、当時の台湾は重視されてない未開発の島、陳第も倭寇平定の祝いにと福建駐在の友人を訪ねる途中、遭難して台湾に漂着している。海禁朝貢体制にある当時の明朝(1368-1644)では海外との正式交流はなく、またその未開さから危険な海峡を渡ってわざわざ台湾へ来る中国人はさほどいません。さらに、中国初渡来の1593年から10年間の短い期間で台湾先住民の有用蔬菜になるかなどの疑問もあります。したがって、「東番記(1603年)」に記載された番薯は、中国経由でない可能性が高いといえます。

3. 大航海時代の余波か？

第2の可能性は、欧州人によるものです。15～17世紀の大航海時代にサツマイモは、欧州人により南米—欧州経由でフィリピンにもたらされたとされています(バタータス・ルート)。1597年にHernando de Riosがスペイン国王に、中国と日本に近い地理上の有意性から台湾・基隆の占有を提案し、同時に地図を献上しています⁵⁾。この台湾地図の作製には相当期間の調査を要したと考えられ、調査時に保存食として携行したサツマイモを台湾に残した可能性は否定できません。また、大航海時期に台湾周辺を沢山の船が航行しており、天気・海流の影響で海難に会い、人が品物とともに台湾へ登陸する記録があります。たとえば、1582年7月ポルトガル領マカオから日本への貿易船が海難で台湾に漂着⁶⁾。1623年オランダ人が台湾の台南を調査した際、数年前に漂着し台湾帰化人となっていたマニラ人を

案内人として同行した記録などがあり⁷⁾、海難時に他の食料とともにサツマイモを台湾に持ち込んだ可能性は高い。また、清代康熙年間(1662～1722)の方志(地方毎の文物、風土等の記録)に、台湾のサツマイモ品種は、スペイン人などの外国人により南アジア、その内の1品種は文来国(今のブルネイ)から、直接台湾に持ち込まれたとの記載があります⁸⁾。以上のことからサツマイモはスペイン人などの欧州人の手により台湾へ広がった可能性が高いと思われます。

4. 先住民・阿美族伝入説

中国人や欧州人が台湾へ来る前から台湾には先住民が住んでいました。その先住民は長く文字を持たず、口述伝承であったことは先に述べたとおりです。古来、台湾の東部一帯、花蓮県・台東県・屏東県に亘る広い範囲に住む阿美族の口述伝承では、彼らの祖先は台湾から東方のココナツが沢山ある島から渡来し、渡来時にサツマイモを持ってきて植えたとあります⁹⁾。また、阿美族が主食としたサツマイモには、赤皮白肉、白皮紫肉、白皮白肉とオレンジ色皮肉などいくつかの種類があり、その種類により名前も違うという¹⁰⁾。また、阿美族の言葉ではサツマイモの芋は“Fonga”、葉は“Kawpel”という。このような口述は、ニュージーランドのマオリ族にあると同類の話です。阿美族の話にある台湾東方、太平洋の島々にはポリネシア人がいます。サツマイモ伝播のクマラ・ルート(南米—大洋州—フィリピン)を担ったのが、このポリネシア人であり、DNA分析では阿美族はポリネシア人に近縁との結果がありま

す¹¹⁾。また、阿美族特有の言葉と習慣で、vacilolという麵包樹（*Artocarpus incisus* (Thunb.) L.f.）（クワ科パラミツ属）を庭に植え、その木の汁からガムなどの特別な食物を作る習慣もあります。このように阿美族はルーツ、言語、習慣などの分析により台湾における他の先住民族と相当に違うことが分っています¹²⁾。このような阿美族が、その口述伝承のように彼らの渡来時にサツマイモを台湾へ持ち込んだとする可能性は高いと考えられる。

5. おわりに

上述の調査結果から台湾への一番早い番薯（サツマイモ）の伝入は、先住民・阿美族による可能性が最も高いといえます。しかし、「東番記（陳第、1603）」³⁾は台湾西部沿岸における記録で阿美族の住む台湾東部の記録ではありません。また大航海時代の欧州人による阿美族に関する記録はなく、証拠的に阿美族の口述伝承しかないので、残念ながら現時点では確証はありません。

古くから台湾人はサツマイモの茎葉を蔬菜（野菜）として利用し、現在でも野菜向けの茎葉品種の育種は重要目標であります¹³⁾。これは「東番記」³⁾の記録に通じるもので、台湾東部で阿美族が栽培していたサツマイモが台湾西南部沿岸に伝わり、そこでは蔬菜としての利用が定着していたとも考えられます。即ち、サツマイモはその遺伝特性から、栽培しても必ずしも塊根ができる作物ではなく、また塊根生産には高度な技術が必要です。この2点、すなわち台湾西南部の地勢や技術から、台湾西南部ではサツマイモは茎葉利用の蔬菜としての



台北北投・復興市場の八百屋。手前左から大根、蓮根、山芋。その奥(中央)左から「サツマイモ塊根(2種)」、「サツマイモの葉」、ミニ大根が陳列されている。



上の写真の拡大図。中央が「サツマイモの葉」（葉柄つき、葉柄の皮を剥く必要のない品種）



台北北投・復興市場の露天。中央の2籠に「サツマイモの葉」が売られている。



前頁3枚目の写真の拡大図。左の四角い籠には「葉柄つきのサツマイモの葉（葉柄の皮を剥く必要のない品種）」、右の丸い籠に「蔓先の葉」

み利用されていたのでしょうか。いずれにしてもまだ謎が多い。今後の台湾在来サツマイモ遺伝資源の研究やサツマイモ農耕や利用についての民俗学的研究が進み、台湾への番薯伝入などについてさらなる解明が進むことを期待しいるところです。

参考文献・資料

1. 勤繹瑾、樽本勲、森川利信 2004 近畿作育研究 49 : 21-23
2. 勤繹瑾、樽本勲、馬彪、森川利信、鮫島吉廣 2004 近畿作育研究 49 : 25-27
3. 陳第 1603 東番記
4. 陳世元 1768 金薯傳習錄
5. 台湾人の台湾史 <http://www.taiwanus.net/history/1/30.htm>
6. 翁佳音 2006 葡萄牙人與福爾摩沙－並論1582年の船難 歴史月刊 220 : 72-79 <http://blog.udn.com/history3/302534>
7. 江樹生譯 熱蘭遮城日誌第一冊
8. 吳炳輝 2005 孫元衡赤崁集詩中的台灣風土 31 : 1-18 <http://www.lib.must.edu.tw/mhj/doc/MJ031001.pdf>
9. 台湾原住民數位博物館 / 各族傳統文化 / 祭儀文化 / 神話傳說 / 阿美族 <http://test.dmtip.gov.tw/Aborigines/Article.aspx?CategoryID=3&ClassID=9&TypeID=17>
10. 阿美族的主食 台東區農業改良場 <http://209.85.175.104/search?q=cache:6KbkK6vUHdoJ:www.ttdares.gov.tw/&hl=zh-TW&strip=1>
11. 林媽利 2001 從DNA的研究看台灣原住民的來源 Language and linguistics 2.1 : 241-246 <http://www.ling.sinica.edu.tw/eip/FILES/journal/2007.3.9.93058412.3365515.pdf>
12. 蔡政良 2004 阿美族 國立台灣史前文化博物館台灣原住民數位博物館計畫 http://www.nmp.gov.tw/enews/no58/page_01.html
13. 甘藷營養及食用法介紹 (1993 花＃63897;區農業專訊 4 : 22-24) http://kmintra.coa.gov.tw/coa/InternetDownloadFileServlet?file_id=2557&actor_info_id=002